

ニュージーランドにおける幼児のしつけに関する第二次調査

○松川 由紀子 村山 貞雄
(山口女子大学) (日本女子大学)

1 研究目的

本研究は、3年前の本大会で研究発表した「ニュージーランドにおける幼児のしつけ調査研究」に続くもので、ニュージーランドの幼児のしつけに関して第二次のアンケート調査をしたものをまとめる。その特徴を考察していくことを目的とする。第一次調査では、①この国の親は食事マナーや就寝時間、朝晩の歯みがき、目上の人に対する行儀作法などはしっかりとしつけている、②全体的にはしつけに對する取り組み、期待が日本の親よりもゆるやか、柔軟で、両親がともにしつけにあっている、③家庭で絵本が大切に扱われている、などの特徴がみられた。その際、性別、年齢、出生順位、機関、地域、人種による差異がみられるのかどうか課題として残されたので、この点について第二次調査で明らかにすることにした。

2 調査方法

- ・調査内容 別紙のとおり。第一次調査で使ったアンケート用紙をもとに若干修正、省略、追加し、全部で115の質問項目がなる。
- ・調査時期 1984年2月～5月ならびに7月
- ・調査対象 ニュージーランド各地の幼児教育・保育機関に通う3、4歳児をもつ親
- ・実施方法 アンケート用紙の配布・回収作業は、主に教育省幼児教育課に依頼する。

3 調査結果

アンケート用紙は1350枚配布され、855枚が回収されたが、うち39枚は無効で、816枚が有効なものであった。第一次調査では277枚が有効な回答であったので、このたびの第二次調査はその約3倍となったが、調査の結果は、全般的には、第一次調査の結果とほとんど重複し、それほど顕著な差異はみられなかった。(なお、別紙に、3年前の本大会で報告した第一次調査の結果にプラスして、第二次調査の結果を〔〕内に示したが、参考にしていただきたい。)しかし、回答者の地域、人種、被調査者の性別、年齢、出生順位、機関によって回答差がいくつかの質問項目にみられた。ここでは、この点を中心に報告してみたい。816名の地域、人種、性別、年齢、出生順位、機関ごとの

内訳は次のようになっている。

- ・地域 都市44.1% 町31.6% いなか24.3%
- ・人種 欧州系87.7% マオリ9.6% 他・不明2.7%
- ・性別 男児51.7% 女児48.3%
- ・年齢 3歳児31.5% 4歳児68.5%
- ・出生順位 第1子38.0% 第2子38.2% 他23.8%
- ・機関 幼稚園58.3% プレイセンター32.1% テコハンガレオ5.5% 他2.5%

ア. 地域による回答差

ほとんどの質問項目でみられなかった。ただ、泥んこ帰宅の有無を問う項目(Q99)で、ごくわずかに都市部よりもいなかに泥んこ帰宅が少くみられた。

イ. 人種による回答差

欧州系とマオリの間には、いくつかの質問項目で回答差がみられ、一般的な傾向として、欧州系の親よりもマオリの親のほうがしつけの態度は若干きびしいようであった。具体的には、おし洗いの粗相(Q38, 39, 45, 46)やおねしょ(Q53, 54)の際、欧州系の親よりもマオリの親のほうが若干少く叱ったり、叩いたりしている。また、寝床での遊び(Q24)や就寝前の水飲み(Q56)もマオリよりも欧州系が寛大であった。

ウ. 性別による回答差

衣服の着脱(Q59, 60)や排泄(Q34, 43)の自立は、男児よりも女児のほうが若干早い。朝の洗顔(Q74)は男児よりも女児がより少くしていた。汚ない言葉(Q108)や泥んこ帰宅(Q99)は女児よりも男児に若干少くみられた。

エ. 年齢による回答差

当然ながら、衣服の着脱(Q59, 60)や排泄(Q33, 37, 42, 44)の自立は年齢が進むにつれて確立していったし、排泄後のおし洗(Q40, 47)、おし洗い(Q91)なども年齢とともに増えていた。また、朝の洗顔をしない時(Q75)、就寝前の歯みがきをしない時(Q72)、食べものの好き嫌いのある時(Q7)、寝床で遊ぶ時(Q25)、年齢が増すにつれて、少しずつしつけようとする態度が親にみられた。

オ. 出生順位による回答差

しつけの不安(Q81)は第1子をもつ親がごくわずかに最も高かった。汚ない言葉(Q108)は第2子以降に若干少くみられた。なお、長男長女別による回答

差はどの質問項目でもほとんどみられなかった。

カ. 機関による回答差

人種による回答差を除けば、地域、性別、年齢、出生順位による回答差は、いわば自然な、あるいは予想のできる性質のものであったが、次に述べる機関による回答差は、ニュージーランド特有のものかもしれない。この国の幼稚園では、大変に自由な教育形態がみられ、親参加もかなりみられるのであるが、プレイセンターでは、幼稚園以上に親参加、親教育の度合は濃厚で、教育方針も非常に許容的である。プレイセンターでは、登降時間やおやつ時間は各自自由で、自発的な遊びは全く外側から中断されることなく続けられる。また、センターの保育者は親のなかから親によって養成され、運営面もすべて親によってなされる。世界的にもきわめてユニークな、親が主体の幼児教育機関である。そして、テコハンガリオは、マオリの独自性を主張した保育機関で、ここでは英語は全く使用されず、マオリ語が使用される。保育内容もマオリの歌や踊り、会話が中心で、しつけの方針も伝統的なマオリ社会でみられたものが採用されている。目下、急速に増加しつつある機関である。テコハンガリオでは、親教育は幼稚園やプレイセンターほどはなされていない。

機関による回答差は、食べ残した時のしつけ(Q12)、食事中の姿勢(Q13)、親のしつけ観(Q83)、おもちゃの跡片づけ(Q94)、泥んこ帰宅(Q99)、目上の人に対する行儀作法(Q107)、絵本(Q114、115)に関して問う項目でみられた。いくつか具体的にみてみよう。「お子さんが自分の皿にあるものを残した時、どうなさいますか」(Q12)と問うたところ、全体的には、「残さないように注意する」と答えた者が約6割で、「好きなようにさせる」と答えた者は約3割であったが、プレイセンターの親は前者が約5割、後者が4割弱で、3機関のなかで最も許容的な態度であった。「食事中にお子さんが変な姿勢をした時、どうなさいますか」(Q13)と問うと、全体的には、「時々注意する」と答えた者が約6割、「常に注意する」と答えた者は約3割であったが、プレイセンターの親は前者が7割弱、後者が約2割で、前問と同じような傾向がみられた。こうしたプレイセンターの親の許容的な態度は、おもちゃの跡片づけ(Q94)や目上の人に対する行儀作法(Q107)のしつけに関して問うた際にも同様の傾向がみられたが、これは、柔軟な、許容的なしつけを大切に考える親のしつけ観に基づくものであるようだ。親のしつけ観を問う項目(Q83)

の結果を表にしてみると、次のようになる(表1)。

表1 お子さんのしつけについて、次のうちあなたのお考えに一番近いものはどれですか(Q83)

親の考え方	実数	%	機関別		
			幼	プ	テ
子どもは親が手を掛けなくともひとりて育っていくものだ	11	13	15	08	44
子どもは小さい時に親がしっかりしつけておくほうがよい	313	38.4	44.2	32.1	51.1
どちらとも言えない	207	25.4	23.3	28.6	20.0
その他	243	29.8	27.4	33.2	15.6
無回答	42	5.1	4.6	5.3	8.9
合計	816	100.0	100.0	100.0	100.0

この表は、「しっかりしつけておくほうがよい」と答える者はプレイセンターの親が最も少ないことを示している。なお、「その他」の欄には、99人の親、とりわけプレイセンターの親によって「親の手本、愛情、理解、支援、励まし、尊厳が大切である」といった内容が記されていた。つまり、プレイセンターの親は最も柔軟なしつけの方法を支持しているようだ。また、プレイセンターでは幼児の自由遊びや親教育を大切にしているために、泥んこ帰宅(Q99)や絵本(Q114、115)に関して問う項目では、3機関のなかで最も顕著な反応がみられた。

一方、テコハンガリオの親は、プレイセンターの親と対照的なしつけの態度を示し、この国の一般的な傾向よりはぐやきびしいようであったが、この点については、発表当日配布の資料で具体的に示したいと思う。

4 考察

既に述べたように、このたびの第二次調査の結果は、全体的には第一次調査の結果とほとんど同じものであったので、3年前に報告した「考察」と同様のことが言えるように思う。ここでは、重複は避けたいので、それに若干付け加える形をとりたい。調査結果にもみられたように、①欧州系とマオリという人種間によるしつけの態度の若干の差異、②最も幼児の自発性を重視するプレイセンター哲学の一端の反映としてみられたプレイセンターの親の許容的なしつけの傾向、この2点が第二次調査では特色として浮かびあがってきたように思う。この国のしつけにみられる多様性ということであろうか。まさに、これはニュージーランドらしい側面であるかもしれない。この国は次第に99文化社会を目指しつつあるのであるから、

最後に、ご協力いただいた教育省幼児教育課ならびに800余名の親の皆様には心から謝意を表したい。